No. 1292

“芸術の秋に”挑戦

「深刻劇、忠治意外伝――座頭市と忠治」。中風で倒れた国定忠治と盲目の座頭市の物語である。東京台東区浅草。このあたりは今なお下町情緒を残している。毎日夕暮になると２人の身障者が松谷福祉会館にやってくる。
下半身マヒで重度身障者の本間康二さん（26歳）と全盲の佐賀善司さん（22歳）だ。２人は「身障者はテレビにも舞台にも出てこない。芸術の秋に何にかやってみようと舞台劇に挑戦、ケイコに取り組んでいる。この話を聞いた台東区のボランテアグループがかけつけ友情出演、ケイコの指導には地元の演出家飯田一夫さんがかって出てくれた。この舞台劇の企画をすると共に台本を書いたのは本間さん自身。本間さんは一歳半の時小児マヒにかかり下半身不随の車イス生活。しかしミニコミ紙「月刊障害者問題」を発行するなどひとりで何んでもやってしまう頑張り屋さんだ。この企画について本間さんは「今の社会ではわれわれはあまり出てきてほしくない存在となっているありのままの姿をもっと見るあるいは見られるべきだと思います」と語る。この本間さんの意見に共感したのが全盲の身でありながら単身上京している佐賀さんである。盲目というハンデのため練習は人一倍きびしい。それでもこの企画に挑戦。佐賀さんは「差別用語も身障者の強みで舞台ではどんどん使っていきたい」と語る。彼等を一番悩ませたのがお金の問題。劇場使用料をはじめ大道具小道具など120万円かかる。自由にならない時間の合い間をぬってたびたび街頭にも出た。この舞台劇の世話人今泉さん等、彼等に善意を寄せる人たちの努力のかいあってやっと見透しがついた。10月16日本番の日である。浅草公会堂にみんな朝早くから集まった。舞台で最後の綿密な打合せが行われた。いよいよ最後の仕上げだ。２人も本物の舞台役者と同じように化粧し、衣装をつけた。不安と緊張の中で幕が上った物語は嘉永３年７月、忠治が中風で倒れ、落ち目の上に身体障害者になったところから始まる。この舞台の中で本間さんは身障者としての自分の姿をありのまま観客に見てもらおうと奮闘する。

医　者――この病人の下半身のマヒは何のせいか著しいものがある。ほれこんなに細うなっとる。

妻や愛人に見捨てられた忠治を盲目の座頭市が訪ね舞台は進行する。そして佐賀さんの意図を盛り込んだ場面を迎える。

市　――そっちはドモリの様だな。ドモリと盲目ならちょうどいい勝負かも知れねえよ。

英五郎――ウー又。云わせておけばこのドメクラ！。

舞台は成功に終った。ふたりが芸術の秋に挑戦したこの舞台劇、多くの障害者たちに強い自信を与えたことだろう。